



Title	大阪大学歴史教育研究会 成果報告書シリーズ20 まえがき
Author(s)	秋田, 茂; 飯塚, 一幸; 堤, 一昭
Citation	大阪大学歴史教育研究会 成果報告書シリーズ. 2023, 20, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/98840
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

まえがき

本書は大阪大学歴史教育研究会の20冊目の活動報告書である。

大阪大学歴史教育研究会は、歴史学と歴史教育をめぐる「高大連携」を推し進めるための恒常的な討議・協働の場として設立された。毎月1度の例会は、2005年4月の設立以来2023年の3月で149回を数えるまでになった。この間多くの大学教員、研究者、大学院生、高校教員がこの会に関わり、発表や討論を重ねてきたことで、会の活動は年を追うごとに充実したものとなっている。

今年度は、1年間を通して「トランスインペリアル・ヒストリーから考える新たな帝国・植民地史研究」と題する連続企画を実施した。この企画では、近現代の新たな世界史やグローバルヒストリーを考えていくうえで参考となる新たな学説「トランスインペリアル・ヒストリー」(transimperial history)の観点から、日本植民地帝国史を含む近現代の様々な帝国・植民地史研究の現状と展望について議論した。幸いにしてこの学説の提唱者の一人であるナディン・ヘー氏を2021年7月に大阪大学人文学研究科に迎えており、この企画はまさに時宜に適うものであったといえる。

本企画を実施するにあたっては、ナディン・ヘー氏（台湾と日本帝国）、安達宏昭氏（大東亜共栄圏と東南アジア）、鈴木英明氏（東アフリカとインド洋西部海域）、平野千果子氏（フランス植民地帝国とカリブ海地域）、宇山智彦氏（ロシア帝国とウクライナ）、菅英輝氏（アメリカ帝国とアジア）という、帝国史、国際関係論（国際政治学）、地域研究の第一線の研究者にご講演をいただいた。先生方には各地域の帝国・植民地史研究の現状を論じていただくにとどまらず、「それらをトランスインペリアル・ヒストリーの観点からどのように発展させられるか」という展望まで示していただいた。さらに、各回でコメンテーターとして歴史研究者と高校教員の2名を立てた。歴史研究者からは、事実上の「第二報告」として主講演者がカバーできなかった項目や地域に関して新たな知見を提供していただいた。他方、高校教員側からは、講演テーマをめぐる工夫された最先端の授業実践例を提示していただいた。この形式を採用したことで、改めて本研究会の原点に戻って、授業で使えるコンテンツ（内容）重視の歴史教育の実践を掲げた、「高大連携」の試みを一歩進めることができたと考えている。

この企画を行った例会では、いずれも多くの方にご参加をいただき大変盛況であっただけでなく、質疑応答や討論の際に全国の参加者から寄せられた質問は、研究会での議論を充実させるのに大きく寄与するものであった。

さらに、今年度も大阪大学の歴史系の学生を中心とする大学院生によるグループ報告を行った。受講生には、毎回の研究会に参加し参考文献を読み込む作業を通じてトランスインペリアル・ヒストリーと従来の帝国・植民地史研究との違いを学び、そのうえで自ら「問い」を設定し、新たな観点から帝国・植民地史を見直すことを要求した。2つの学生グループは、それぞれ「アジア系移民」「東アジアの経済成長」をテーマとして選定し、半年間に渡る準備の成果を12月に開催された第147回例会においてグループで報告し、さらにそれをもとにしたレポートを共同執筆した。本報告書にはこの成果であるレポートを掲載しているので、ぜひご一読を賜りたい。どちらのレポートも、専門の異なる受講生がトランスインペリアル・ヒストリーという新しい学説と真正面から向き合い、グループ内で議論を重ね、苦心の末に完成させたものである。それらはトランスインペリアル・ヒストリーを用いた最新の事例研究であるだけでなく、教育現場への還元を目指すものともなっている。新しい学習指導要領で導入された「歴史総合」「世界史探究」「日本史探究」の全てにおいて、帝国・植民地史が重要なテーマとなることが見込まれるなかで、今年度のレポートがその先駆的な成果として全国の教員に参照されるものとなれば幸いである。

新型コロナウイルス感染症の影響が徐々に落ち着いてきたため、今年度は対面を主としてオンラインを併用するハイブリッド形式で開催した。会場に報告者やコメンテーターを迎えて対面で議論を交わすことで、研究会は以前の熱気を取り戻したといえる。とりわけ大学院生にとって、報告者に直接質問ができることの教育的意義はとても大きなものであったように思われる。さらにZOOMを用いたオンライン開催も引き続き採用することで、全国から多数の参加者を迎える体制を維持することができた。次年度もハイブリッド形式を継続しつつ、対面重視での質疑・討論を展開したい。皆様には、是非とも会場にお越しいただき、3名の講師・コメンテーターを交えた熱のこもった議論に加わっていただきたい。

月例会以外の場合でも、高大連携歴史教育研究会や関連する各地域の研究会などに本研究会の関係者が多数参加し、また堺市博物館をはじめとする外部組織と連携した活動を活発に展開した。それらに関する詳細は、巻末の活動記録を参照されたい。

最後に、2022年度の活動にあたり参加・協力して下さった研究者、院生・学生、高校教員、事務職員ほかすべての皆さんに、厚くお礼を申し上げたい。

2023年3月 秋田茂・飯塚一幸・堤一昭